

研究概要

「クラブカルチャーを通してみる個人化と共同の往復関係」(仮)

武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻  
博士前期2年 北村心平

本研究はクラブという空間における自身の体験や、オーディエンスとして日頃クラブに通う人々の目的や経験における語りをもとに、「個人化と共同の往復関係」を踏まえたオーディエンス像を捉えることで、クラブという空間における経験やコミュニケーション、趣味嗜好の共有について検討する。

1章では、クラブカルチャーの歴史的背景と文化的な立場について記述していく。主に日本におけるクラブカルチャーを中心に記述していく。それはある時期まで海外の文化との追随によって成り立つものである。日本においては特にターミナルや外国人の集う場所で経営されていることが多いこともあり、多様な地域や人種が交差するグローバルな空間として機能している。

2章においては、自身の参与観察などのフィールドワークやクラブに通う人にインタビュー調査した内容を元に、クラブにおける空間利用について検討していく。クラブカルチャーは歴史的に当事者側からの視点と、外側からの視点との乖離が目立つ。

確かにクラブカルチャーは一言で表しづらいものであり、視点の切り取り方によって異なる側面を喚起するにちがいない。それを許容するような空間作用がある。オーディエンスはフロア内を縦横無尽に動き回ったり、振り付けに縛られない自由なダンスが許される。四方から放たれるサウンドが鳴り響く中では、会話というコミュニケーションが背景に追いやられる。クラブにおいては言語的な交換は絶対ではなく、人間関係が曖昧になる経験をする。大勢の人が集まるクラブでは、E・ゴッフマンの「儀礼的無関心」(Goffman 1963=1980:93)の作法が働いていながら、音を媒介に、第三者へと関係が発展する場合や、集団から個人へと遊離することもできる。その振る舞いは、個人化と共同を往復運動するマージナルなものであるといえる。

3章においては、小箱と大箱の空間利用について述べる。個人化と集団化の往復運動のなかで場の分化が行われていることを示す。クラブという空間は大箱・中箱・小箱という分類の仕方があるが、基本的に大きければ大きいほど様々なトライブが重なり合う空間で、小さい箱の個人は小集団に組み込まれる単一な空間である。しかしネット上のつながりを利用して、クラブにしながら外部との接続が可能になったことで、現場とネットとの往復運動で柔軟で幅広い活動範囲を獲得した「クルー」と呼ば

れる団体に注目していきたい。クルーは自主レーベルやイベントの主催として活動している団体である。この団体は大抵ネット上のつながりなど、緩やかな内輪で形成されている関係であるが、それゆえに一定のフォロワーがおり、比較的自由にイベントを打つことができる。フロアや DJ、サウンド、客層など、クラブイベントという空間を規定する環境は様々である。そのなかに入り混んだ、スマートフォンというモバイルなツールによって演技される「ポータブルな人格」(Anthony Elliott and John Urry 2010:4)をもとにシーンを再構成していくのである。

以上を踏まえて、現在までの研究過程で言えることは、一つ目にクラブはマージナルな場で、個人化と集団化の往復運動の契機が生じやすいこと。二つ目に、ネットとクラブとの往復運動のなかで形成される文化経験があることで、私たちのクラブでの経験も変容している。今後はこうした調査結果を用いて概念整理を行い、新たな課題を見つけていきたい。

#### 参考文献

Goffman, Erving, 1960, Behavior in public space: Notes on the Social Organization of Gatherings (=1980, 丸木恵祐・本名信行訳, 『集まりの構造』 ---新しい日常行動論を求めて)

Anthony Elliott and John Urry, 2010, Mobile Lives (=2016, 遠藤英樹訳, 『モバイル・ライヴズ』, ミネルヴァ書房)